

介護のあり方の世代間連鎖に関する研究

The Study of the relationship in which the Child Cares for their Parent Later in Life
—親世代が祖父母世代の介護者になることが、子世代の介護の認識に与える影響—

濤岡優 Yu Namioka
(北海道大学 Hokkaido University)

<要 旨>

本研究の目的は、祖父母世代・親世代から子世代への介護認識の連鎖（介護の世代間連鎖）の観点で、高齢者介護の担い手の問題を検討することであった。

現在、日本の高齢化社会の中で、家族介護の負担の大きさが指摘され、その解決が求められている。一方で、家族が積極的に介護の担い手である現状も指摘される。さらに、若い世代においても、依然として、家族介護に支持的な態度を示す者が一定数いる。このような現状をふまえて、本研究では、親世代と祖父母世代の介護の関係のあり方が、子世代の介護認識に何らかの影響を与えていることを想定し、将来の介護の担い手と想定される子世代が、親—祖父母世代の介護関係から受ける影響を明らかにすることを試みた。

そのために、以下の2つの研究を行なった。研究1では、309名の20代の男女を対象に、子世代の家族介護に対する認識の実態を明らかにするためのオンライン質問調査を行なった。また、研究2では、20代6名の男女を対象にインタビュー調査を行った。結果、祖父母世代が介護を必要とする状況に置かれる時点で、子世代はすでに祖父母や親の介護について考える立場に置かれていること、したがって、今後、高齢者介護や家族介護について検討する際には、親世代と祖父母世代だけでなく、子世代も含め、政策や制度整備を行っていく必要があると考えられた。

<キーワード>

家族介護、世代間連鎖、親子関係、複数世代

【はじめに】

近年、日本社会の高齢化を背景に、高齢者の介護における家族負担の大きさが指摘され、その解決策として、介護制度の整備が進められている（介護の社会化）。しかし現状として、介護制度は積極的に利用されず、介護者はいまだに被介護者の家族である場合が少なくない。具体的には、介護を自ら担うことへの家族の強い志向性ゆえに、介護を家族以外の他者に委ねることができないケースや、家族が被介護者の人生に関する知識を持つこと自体に価値や意味を見出し、積極的に介護の役割を引き受けていくケースが報告されている（井口, 2002 ; 木下, 2019）。さらに、将来の介護者として想定される若い世代（子世代）にも、親の介護は子が担うべきという認識が見られ、自

らも家族による介護を望む者が一定数いる（内閣府, 2003 ; 2010）。

以上のことから、家族介護の問題は、今実際に介護に関わる親世代と祖父母世代で完結する問題ではなく、将来介護の担い手になることが想定される子世代の段階で、すでに家族介護認識が形成されていると予想される。つまり、家族が家族の介護に関わり続ける要因は、直接的に介護に関わる、介護者と被介護者間の介護関係を越えて生じていることが予想される。したがって、本研究では、子世代の介護認識が、親—祖父母の介護関係から、何らかの影響を受けることを想定し、祖父母世代と親世代の介護関係のあり方が、子世代の家族介護認識に与える影響の解明を試みた【研

究 1】。さらに、個別具体的な文脈をもつ家族関係の中で、子世代は、親-祖父母間の介護関係の中にどのように組み込まれ(子の立場)、家族介護を意味づけているのかを検討した【研究 2】。

研究 1：親-祖父母の介護関係が、子世代の家族介護認識に与える影響の解明

【方法】

調査協力者と手続き 親が祖父母の介護の担い手である群(親介護群)、親以外が祖父母の介護の担い手である群(親以外介護群)、祖父母が介護を必要としていない群、の3群(介護不要群)を設定し、それぞれの群で103名ずつ、合計309名の20代の男女(男性59名、女性250名)を対象とした。インターネット調査会社(マクロミル)に調査を委託し、オンライン上で調査を行なった。

調査時期 2020年10月

調査内容 1) **家族介護に対する感情尺度** 柴田ら(2010)が作成した家族介護に対する感情尺度のうち9つの項目を使用した(義務感:3項目、自己成長への期待感:3項目、否定的感情:3項目)。2) **家族介護意識、社会化、介護継続意志** 唐沢(2006)の家族介護意識を測る4項目、社会化を測る2項目、家族継続意志(「介護意思」に変更)を測る4項目を使用した。3) **介護負担感** 唐川(2009)が、先行研究から、介護負担感として同定した5つの構成要因のうちの項目で、身体負担を測る3項目、家計への負担を測る3項目、介護による拘束感を測る3項目、家族のネガティブな態度を測る3項目、他者からの支援を測る3項目の計12項目を使用した。なお、1) - 3)は、親と祖父母の介護関係や、それに対する子世代の認識を尋ねるために、適切と思われる文章に変更した。4) **介護接触機会** 親-祖父母の介護関係への接

触機会の程度、将来の親の介護を考える程度、将来自分自身が家族介護を希望する程度を尋ねる質問を1項目ずつ使用した。具体的には、「あなたは、自分の両親が祖父母の介護している姿を目にする機会や、その話題に関する話をする機会はありますか」、「これまでに自分自身の親の介護について考えたことはありますか」、「将来あなた自身が介護が必要になったときに、家族に介護してもらいたいと思いますか」の3項目だった。

以上について、5件法で回答を求めた。なお、オンライン調査のため、回答しない場合は、そのあとの質問に回答できない設定になっている。したがって、倫理的配慮により、5件法に加えて「答えたくない」という選択肢も設定した。

【結果】

3群の差の検討 親介護群、親以外介護群、介護不要群の3群を要因とし、家族介護意識、社会化、介護意思を従属変数とした1要因の分散分析を行った。なお、各変数の α 係数は、家族介護意識で.76、介護の社会化で.65、介護意思で.85となり、介護社会化でやや低い値を示したが、項目数を考慮し、許容範囲であると判断した。分析の結果、いずれにおいても有意差はみられなかった($F(2,306)=1.27, n.s., F(2,306)=0.23, n.s., F(2,306)=1.63, n.s.$)。

次に、上述の3群を要因とし、親-祖父母の介護関係への接触機会の程度、将来の親の介護を考える程度、将来自分自身が家族介護を希望する程度を従属変数とする1要因の分散分析を行った。有意差がみられたのは、親-祖父母の介護関係への接触機会の程度($F(2,305)=51.39, p<.001, \eta^2=.25$)、将来の親の介護を考える程度($F(2,304)=1.07, p<.001, \eta^2=.07$)であった。Tukey法による多重比較の結果、親-祖父母の介護関係への接触

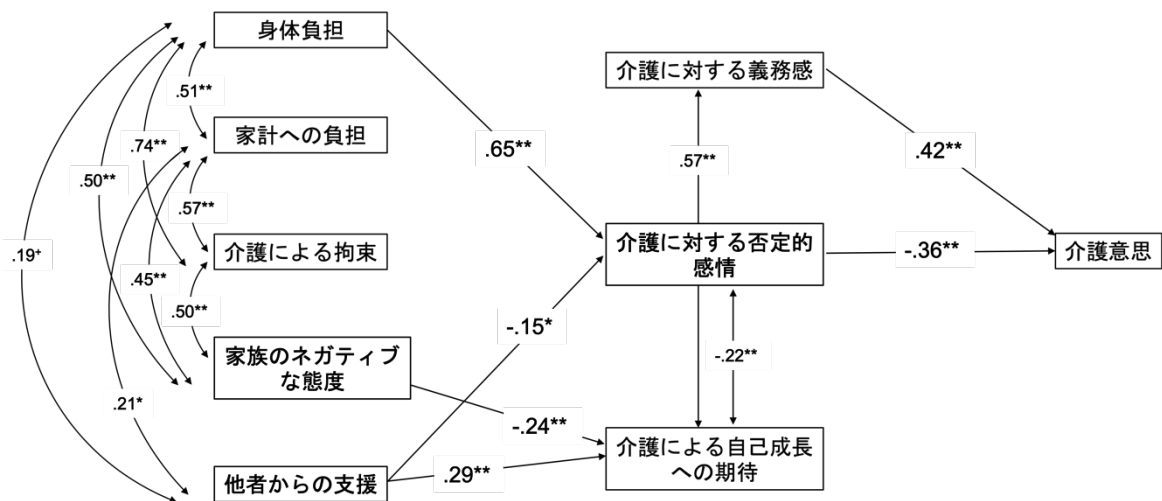


Figure 1 家族介護に対する感情尺度、介護意思、介護負担感の関連

注1: ** $p < .01$, * $p < .05$ 注2: 誤差間相関、および因子間の相関係数は省略
GFI=.97, AGFI=.90, CFI=1.00, RMSEA=.03

機会の程度は、親介護群と親以外介護群で、介護不要群よりも高かった。また将来の親の介護を考える程度は、親介護群と親以外介護群で、介護不要群よりも高かった。

親介護群のみの検討 家族介護に対する感情尺度について、柴田ら（2010）による4因子モデルから、予期された介護負担感を除く3因子モデルを想定し、確認的因子分析を行った。その結果、適合度は、GFI = .86, CFI = .896, RMSEA = .08, SRMR = .68, AIC = 210.78 であり、十分なモデルのあてはまりが確認された。 α 係数は、義務感で.65、自己成長への期待感で.74、否定的感情で.72であり、許容できる値を示したため、各項目の加算平均を算出し、得点化を行った。続いて、親介護群のみのデータを用いて、介護を担う親に対する認識を独立変数、介護意思を従属変数とする重回帰分析を行った。その結果、義務感は、介護意思と有意な関連がみられた($R^2=.31$, $b=.43$, $SE=.10$, $\beta=.43$, $t(99) = 4.18$, $p < .001$)。すなわち、親-祖父母の介護関係を義務と感じているほど、子の介護意思が高くなる傾向が示された。

さらに、介護負担感と介護意思との関連が、家

族介護に対する感情尺度によって媒介されるモデルについて、共分散構造分析を行なった (Figure 1)。有意な関連がないパスや共分散を削除し、最終的なモデルとした (GFI=.97, AGFI =.90, CFI=1.00, RMSEA=.03)。Figure1 から、将来の親の介護に対する介護意思は、現在の親の介護負担感の認知と関連を示さないこと、一方で、身体的負担の認知は、介護に対する否定的感情と負の関連を示し、さらに介護に対する否定的感情は、介護意思と負の関連を示すことがわかる。

以上の結果をまとめると、祖父母の介護の担い手の違いに関わらず、祖父母世代が介護を必要とする状況にある時点で、子世代はすでに祖父母や親の介護について考える立場にあることがわかった。また、子は親が祖父母の介護に身体的負担を認識しているほど、親が介護の担い手であることに否定的な感情をもち、将来親の介護を担う意思も低くなること、さらに、親が友人からの支援を受けていると認識しているほど、否定的な感情は低くなることも明らかになった。一方、親の負担感を認識しているかどうかは、祖父母の介護を親の義務として認識するかどうかに影響を与え

ず、さらに、祖父母の介護を親の義務と認識しているほど、将来、子も親の介護を担う意思を持つことが明らかになった。

【考察】

以上の結果から、20代であっても、子世代の将来親の介護の担い手になるという意味は、祖父母の介護を、親の義務として認識している時点で、すでに明確に意識されているといえる。また、祖父母の介護の担い手の違いよりも、祖父母がどのような状況の中で介護を受けているのか、その具体的な状況を把握することで、子世代が受ける影響を検討することが可能になると考えられる。

研究2：個別具体的な文脈での子の立場と、介護に対する意味づけの検討

【方法】

調査協力者 20代の男女各3名(親の介護を担う意思をもつ者3名、施設等の利用を考えている者2名、親の介護に葛藤している者1名)(Table 1)。

調査時期 2020年3月から6月の時期

手続き 1-2時間のオンラインでの半構造化インタビューを、1人1回行った。

質問項目：①家族構成・介護の状況、②親-祖父母の介護関係に対する認識、③将来の親の介護

分析の手続き 分析では、語られた内容や意味を、家族構成や家族の置かれた文脈の中で検討した。分析の視点は以下の2つ、すなわち、①家族介護の中で子はどのような立場にあるのか、②その立場から、介護はどのようなものとして意味づけられているのか、を設定した。

【結果】

協力者の背景と、将来の親の介護に対する認識

Aさん：Aさんの語りでは、主に父方の祖父のことが語られた。Aさんは、幼少期から両親と父方の

祖父母の2世帯で暮らし、Aさんが大学を機に家を出たあとも、両親は、祖父母と同居したままの生活を続けていた。Aさんは、自身が高校生するとき、祖父が癌になり、2年間ほど入退院を繰り返していたが、最後の療養期間は、自宅に戻り家族で祖父の看病をした。当時のAさんは、高校受験を控えていたため、ほとんど祖父の看病に関わることはできなかったと話していた。それでも、祖母と母親が主体となって、祖父の看病をしている姿を見ていたため、当時の様子や、祖父の状態も鮮明に覚えていた。さらに、インタビュー当時、Aさんは、首都圏で1人暮らしをしながら働き、今の仕事にやりがいも感じていたが、今年度いっぱい仕事を辞めて、祖母と両親の暮らす実家に戻ることを数ヶ月前に決断していた。その決断の理由は、母親が自分の両親の家に通いながら、介護している当時の状況を支えるためであり、またAさん自身が、将来親の老後を支え介護に関わっていくことを見据えてだった。

このように、20代後半のAさんは、将来親の介護の担い手になることを明確に意識し、そのための計画をすでに立てている状況だった。

Bさん：Bさんの語りでは、主に母方の祖父のことが語られた。その祖父はインタビュー当時から数年前に、老衰で他界している。祖父は癌ももっていたため、病院に入院していた時期もあったが、祖父の願いもあり、最後は祖父母の住む自宅に戻り、訪問医療や介護を入れながら、自宅で亡くなった。また、Bさんの母親は祖父母の家のすぐ近くに住んでいたため、通いながら生活を支え、祖父の最後を看取っている。当時のBさんは、家庭を持ち、両親とは離れて生活していたが、祖父が亡くなる数ヶ月前に実家に戻り、祖父の介護を担う母親を支え、またBさん自身も祖父と親しい関

係にあったため、祖父の介護に自ら関わっていた。 かったため、親の介護に関しても明確な意思を持
 このような背景をもつBさんは、今後自分がど っていないかった。それでも、自宅で最後を迎える
 こに住み何をするのか、明確な展望が見えていな ことを願う親の思いを尊重したいと考え、自分が

Table1 調査協力者の家族構成、および介護に関する情報

将来親の介護者になる意思	子世代		親世代			祖父母世代		
	協力者と きょうだい	年齢	年齢	きょうだい構成	仕事の有無	年齢	死因 (現在・亡くなった当時の居住状況)	
介護意思あり	Aさん(女性)	28	父	50代中盤	1人	定職	祖父 70代中盤 (他界) 癌 (病院・自宅療養)	
							祖母 80代中盤 (別居・1人暮らし)	
	姉	30代前半						
			母	50代前半		定職	祖父 80前半	
							祖母 80前半 (別居・1人暮らし)	
	Bさん(女性)	28	父	50代後半	2人	定職	祖父 80代中盤 (兄弟夫婦と同居)	
							祖母 80代中盤 同上	
	妹	20代中盤						
			母	50代後半	1人	主婦	祖父 80代後半 (他界) 癌, 老衰 (病院・自宅)	
							祖母 90代前半 (別居・1人暮らし)	
	Cさん(男性)	25	父	(離婚)			祖父	—
							祖母	—
	兄	30代中盤						
			母	60代前半	2人		祖父 70代前半 (他界) 癌 (—)	
							祖母 90代前半 腎機能低下 (母親と同居)	
介護意思なし	Dさん(女性)	23	父	70代前半	4人	定職	祖父 80代後半 (他界) 病死 (病院)	
							祖母 80代後半 (他界) 認知症・老衰 (病院・施設)	
	兄	20代中盤						
			母	60代前半	5人	定職	祖父 90前半 (他界) 認知症 (—)	
							祖母 90代中盤 (長男と同居)	
	Eさん(男性)	29	父	60代前半	2人	定職	祖父 — (他界) 癌 (—)	
							祖母 80代中盤 認知症・高血圧・糖尿病 (グループホーム)	
	弟	20代後半						
		母	60代前半	2人	定職	祖父 — (他界) 脳梗塞・合併症 (—)		
						祖母 — (他界) 交通事故 (—)		
介護への葛藤	Fさん(男性)	27	父	70代中盤	8人	—	祖父 — (他界) —	
			義父				祖母 85 (他界) —	
			母	70代前半	6人	—	祖父 — (他界) 交通事故 (—)	
							祖母 92 (他界) 認知症 (老人ホーム・精神科)	
						義祖父 75 (他界) 癌・認知症 (—)		

それを支えることが可能な状況にあった場合には、そうしたいと思っていると語った。

Cさん: Cさんの語りでは、母方の祖母のことが語られた。祖母は当時、腎機能の低下が原因で、透析が必要な状態にあり、数年前には入退院も繰り返していた。また、認知機能の低下もあり、物忘れも激しくなっていた。さらに、Cさんの両親は、Cさんの物心がつく前に離婚したため、Cさんは長い間、祖父母と母親の3人で暮らしていたが、大学に進学するため実家を出た。その後就職を機に実家に戻り、当時は祖母と母親とで生活していた。実家の近くで就職した背景は、幼少期の頃、Cさんの母親は働きながら子育てをしていたため、Cさんは祖母と過ごす時間が多かった。そして、腎機能の低下によって弱った祖母の姿を見て、祖母を元気づけたいという思いを持っていたところ、希望する条件に叶った職場が実家の近くであり、採用が決まった、という経緯がある。

このような背景をもつCさんは、将来親の介護が必要になったときは、自分がみたいという思いをもち、また自分自身も将来介護が必要になったとき、可能な限り家族にみてもらいたいと語った。

Dさん: インタビュー当時、Dさんの祖父母のうち、3人はすでに亡くなっていたため、母方の祖母との関係について語られた。また、Dさん自身が、介助の仕事に関わっていたため、その経験も踏まえて、家族介護について語った。祖母は、当時父親のきょうだいと同居していたが、特別な介護が必要な状況ではなかった。Dさんの両親は、きょうだいが多く、亡くなった祖父母に関しては、きょうだいでそのサポートに入っていた。一方、Dさんの両親は、子育てが大変な時期だったため、介護に積極的に関わっていなかった。加えて、Dさ

んの父親は、インタビュー当時70代だったため、Dさんは近い将来の介護について父親から話を聞く機会もあったが、父親は、子から介護を受けることを希望しているわけではなかった。最後に、Dさん自身は、仕事の中で、家族で家族の生活を支えることの大変さや困難を認識していたため、家族介護や、自分が親の介護者になることの限界についても語っていた。

このような背景をもつDさんは、将来親の介護が必要になったとき、積極的に介護に関わることは考えていないと話していた。

Eさん: Eさんの場合も、父方の祖母以外はすでに他界していた。したがって、介護に関する語りは、今グループホームで生活している祖母の状況を中心に語られたが、その背後には、母親とその祖父の介護関係に対するEさんの認識が強く影響していた。祖父は、脳梗塞と癌が原因で亡くなっているが、病院で治療を受けていた期間があり、Eさんの母親は働きながら、病院までの送迎や薬の管理を担っていた。当時のEさんは、小学校中学年で、Eさん自身は祖父母と親しい関係にあったが、母親が介護をする姿には負担を感じていた。したがって、その頃から、家族で介護をすることに否定的な思いを持っていたと語った。さらに、母親が祖父の介護に関わっていた理由も、母親自身の思いというより、Eさんの家族が住む地域・世間全体の価値観や、周りからの圧力の影響が大きかったと語っていた。

このような背景をもつEさんは、当時、父方の祖母がグループホームに入っている現状も肯定的に受け止めていて、さらにEさんの両親が介護を必要とする状況になったら、施設を利用することは両親とも合意していると話していた。また、Eさん自身も将来は施設に入る意思を明確に持つ

ていた。

Fさん: Fさんの語りは、母方の祖母のを中心に語られた。祖母は、数年前にすでに他界していて、最後は緩和ケアを目的とした病院で亡くなっている。Fさんの祖母は、祖父が亡くなった後も、家族のサポートを受けながら1人で生活していたが、認知症の診断を受けたあと、家族で十分に話し合えない状況の中で、老人ホームに入ることになり、またその1ヶ月後には精神病院に移っている。さらに、祖母自身は家に帰りたという思いを持っていたが、親戚や家族の中で祖母の生活サポートをする余裕のある者がいなかった。Fさんの母親は祖母を引き取りたいと願っていたが、夫（Fさんの父親）からの協力が得られず、また母親自身も精神的に不安定な状態だったため、実現することができなかった。そして祖母の願いを聞けないまま、亡くなってしまったことに対して、Fさんの母親は強く後悔していて、Fさんはその母親を励ます立場にあった。さらに、Fさんは高齢出産で生まれたため、両親はすでに、70代に入っていて、Fさんは近くにいてもらいたいという母親の強い願いを感じていた。一方、Fさん自身は、両親を支えるための収入を得る必要性から、今の仕事に転職しているが、Fさん自身が希望する仕事があったため、さらなる転職を考えていた。しかし、Fさんの中では母親の生活を差し置いて自分の人生の選択をする決断に踏み出せず、悩んでいる状況にあった。

このような背景をもつFさんは、家族が家族の介護者になることで、十分なケアやサポートができないままになってしまう状況を懸念する思いがあった。したがって、親の老後のサポートをしたいという思いがありつつも、自分が関われないときに、代わりに親の介護を担ってくれるような

システムが欲しい、と語っていた。この語りの背景には、家族で介護できないまま祖母が亡くなった経験や、今すでにFさんの両親が介護を必要とする状況が影響していると推測される。

①家族介護の中で子はどのような立場にあるのか、②その立場から、介護はどのようなものとして意味づけられているのか

Aさん: ①家族介護の中での立場　すでに述べたように、高校生のときに祖父が癌でなくなったAさんの場合は、家族全員で祖父の最後を看取った。しかし、Aさん自身は受験を控えていたため、他の家族よりも、積極的に関わることができなかったと語っている。具体的には、「(家族は祖父の介護に) 一生懸命だったというか、必死だったと思うんだよね。だから、特に揉めたりとか、方向性の違いとか、そういうのはかなったし。私自身、今思うともうちょっと手伝えるところはあったかなとは思うけど。(祖父の最後は) 最善だったんじゃないかな。」と語っている。この語りから、Aさんは、家族が祖父の介護を担い看取った状況を、「最善」と受けとっていることが理解される。

②家族介護に対する意味づけ 上述した立場にあったAさんにとって、介護は「恩返し」として意味づけられていた。具体的には、「育ててくれた恩じゃない? (中略) だから (親が) 望むなら (介護) できるように、できるような環境でそのときいたいから」と語っていた。Aさん自身の親は、Aさんに介護してもらうことを要求しているわけではない。しかし、Aさんは親に対する「感謝」を、自らが介護者になることによって表現していることが理解される。

Bさん: ①家族介護の中での立場　Bさんは、祖父が介護を必要とする数ヶ月間、母親を支えながらBさん自身も祖父のサポートをしていた。当時の

ことについて、Bさんは「あたしも母も、「やることやったよね」みたいな。「できることやってあげたよね、おじいちゃんに」つって。」「みんなで全力でおじいちゃんおばあちゃんを支えたって感じ」と語った。このように、Bさんは、主に介護を担っていた母親とともに、自分自身も介護に関わりながら、自分にできることをしていた、という認識をもっていることが理解される。

②家族介護に対する意味づけ このような立場にあったBさんにとって、介護は「生活の一部」として語られた。たとえば、「家族にご飯作ってあげる感じじゃない？それは別に義務じゃないけど、作らなかつたらお腹すいちゃうじゃん」「生活の延長線？ここからが介護ですよーっていうわけじゃなくって、ちょっと手伝いが必要になった感じかな、生活で」と話していた。このように、Bさんにとって、介護は、介護単体として取り出せるものではなく、生活という枠組みの中にあるものであり、特別な営みとして意味づけられているわけではないことが理解される。

Cさん：①家族介護の中での立場 すでに述べたように、Cさんは当時、腎機能の低下により、透析治療を必要とする祖母と母親と一緒に生活していた。そして、「自分が（実家に）帰って元気になるんだったら良いなって思ったんで、（戻ってきたことに関しては）重くは受け止めていない。（中略）（祖母のことに関しては自分が）できることだけ、可能な範囲で。やりたいこと自分がやってるんで。」と語られるように、Cさんにとって実家に戻ってきたことや祖母のそばにいることは、特別大きな負担や出来事ではないことが理解される。**②家族介護に対する意味づけ** Cさんは、家族が家族の介護者になることについて、以下のように語った。「やっぱり家族が（介護を）やるっ

てというのは、必要なことなのかなって思いますね。

（中略）（家族の中で）ずーっと繰り返されることなのかなって思うんで」「ヘルパーさんとか、施設のコミュニティとか（任せることは）できると思うんですけど、多分そのどれにも家族は当てはまらないと思うんで、それ（家族介護）がゼロになっちゃうってというのは寂しいですね」。この語りから、Cさんにとっての家族介護は、子が親を育てる営みと同様に、家族によって担われるものであり、同時に、家族によって提供される介護は、ヘルパーや介護施設といった社会的資源が提供する介護とは異なるものとして、意味づけられていることが理解される。

Dさん：①家族介護の中での立場 Dさんの両親は、祖父母の介護に関わる機会があまり多くなく、したがって、Dさんは、祖父母の介護に積極的に関わる立場ではなく、祖父母が介護を必要とした状況を間接的に聞く立場にあった。またDさんの父親も、自分の介護で負担をかけるつもりはないことを、Dさんが高校生の頃から伝えていた。そのことについて、Dさんは「父の両親、私の祖父母が亡くなったときとか、祖母の場合だったら、施設とか病院に入院してた期間が長かったりして、そういうのを見てたからこそ、父の中で考えがあったんだろうなって思います」と語るように、父が自分や自分の兄から介護を受けるつもりはないその思いの背後に、父親自身の経験があると考えていることがわかる。

②家族介護に対する意味づけ 以上のような立場にあるDさんは、仕事の中で家族介護の苦労を見ていることもあり、家族で介護することの限界を語った。具体的には、「（親との）関係性が密っていうか近ければ近くなるほど、私が疲れちゃって、それこそ自分が手をあげるって絶対わかるっ

ていうか、そうなる可能性がすごく高くなって感じるから、(親の介護への関与は)しない方が良くなって思う」と語っていた。このように、Dさん自身は、家族介護や自分自身が親の介護者になることに、肯定的な認識をもっていないことがわかる。一方で、「家族介護、家族介助みたいなのを当たり前みたいなふうにして、強要されることがおかしいと思うので、(中略) だけど、完全に親のこと放置みたいな人が増えるのは悲しいなとも思うし、私は多分介護とか介助では親にめっちゃバリバリ入るつもりはないし、できないって思うけど、だからといって親子の関係は、きちんと持って接していきたいって思っているのでも」とも語っていた。この語りから、介護以外の方法で、親子として関わっていききたいというDさんの思いが理解される。すなわち、介護を介さない形で親子としての繋がりを想定していることがわかる。

Eさん：①家族介護の中での立場 すでに述べたように、祖父の介護が母親に与える負担の大きさを認識していたEさんは、祖母がグループホームで生活することに対して、以下のように語った。「合理的な選択としては、施設にに入れて専門知識をもった人のもとでみてもらうっていうのが一番誰にとっても、安全だろうというふうに僕は思ってたから、そうやって伝えてはいた」。このように、両親が働きながら祖母の介護を担うことは、肯定的な選択として認識されていないこと、したがって、Eさん自身も、祖母の介護に直接的に関与しない立場にあることがわかる。

②家族介護に対する意味づけ Eさんは、家族介護について、以下のような認識を持っていた。「どっかのタイミングではよう死ねよって思っちゃいそうな感じがあって。(中略) やっぱみんなそれを乗り越えて介護してるっていうのは、いろんな

ところで聞くし、親に対してそんな感情を抱きたくないというか。(中略) 良い関係でいられた方がお互い結果的にはハッピーな気がします」。このように、Eさんは生活の余裕がない中で、家族が介護の担い手になったときに、家族として繋がることを困難にする可能性を認識している。すなわち、家族としての関係を安定的に継続させることを阻むものとして、介護が意味づけられていることが理解される。一方で、「施設に入っただの、サービスを利用したからといって、家族の関係が切れるかっていったら、そうではない。また違った形の繋がりを模索していけば良いんじゃないかなーと思う次第です」と話していた。この語りから、Eさん自身が、介護に関わらない形で、家族として繋がり続ける方法を模索していることもまた理解される。

Fさん：①家族介護の中での立場 Fさんは、祖母が家族による介護を希望していたときに、母親が祖母のサポートを引き受けたい思いがありながら、それができなかったことに、後悔し続けている姿を見ていた。また、「おばあちゃんが亡くなるタイミングでも(自分が)一番仕事が忙しいピークぐらいがきてたから、(中略) 病院とか(会いに行けるけど、「じゃ、俺が介護してやるよ」みたいな感じまでは踏み切れなかったっていうのは事実で」と話していた。この語りから、Fさん自身も自らが祖母の介護の担い手になる可能性もある立場にあり、しかし最終的には、家族で祖母の介護を引き受けられなかった状況が理解される。

②家族介護に対する意味づけ すでに記述したように、Fさんは高齢出産で生まれたため、当時はすでに両親の介護を身近な課題として認識していた。しかし、Fさん自身はまだ20代後半でこれから新しい領域の仕事に挑戦したい思いをも

っていた。したがって「ぶっちゃけた話をするなら、親のこと考えなくても済むんだったらもう、〇〇したいではある。(中略)けどそこまで(親を)切り離せないって考えたうえでの〇〇に関わるようなことっていうのを自分なりに考えてる。

(中略)どこを優先すべきなのかっていうのがたまに分かんなくなる。だから誰の人生生きてるんだろうってたまに思うんだよね」と語られるように、親の介護の必要性が見えている状況の中で、自分のための人生の選択に葛藤していることが理解される。このような状況を背景に、Fさんは「人生のタイミングじゃないけど、ここ頑張り時、みたいなタイミングで社会のシステム頼れるなら、とか、ここは僕たち(家族)が見ます、みたいなそういう選択制があるなら助かるなっていうのは思うところ」と話していた。このように高年齢の親をもつFさんにとって、親の介護はFさんの人生における選択を困難にするものでありながらも、完全に社会に委託するものとしてではなく、自分の人生のタイミングと折り合いをつけながら、関わっていきたいものとして意味づけられていることがわかる。

【考察】

以上の結果を踏まえると、それぞれの置かれる立場によって、介護に対する意味づけや親世代が歳をとるといふ将来の現実との距離のとり方・自らの関わり方は異なっていること、一方でその根底では、家族としての関係そのものが否定されていないことが理解された。特に、親の介護に積極的に関与する意思を持たない協力者の場合、その不関与に対する、周囲のネガティブな反応を認識しながらも、その行為が、家族の関係そのものの断絶を意味しないという認識を強く持っていること、さらにいうならば、家族の関係を継続させ

るために、介護と距離を置くという関わり方を選択していることも理解された。

【総合考察】

以上の研究1・2から、日本の家族介護の問題を検討する際には、実際に介護に関わる親一祖父母世代のみに焦点をあてるのではなく、次介護世代にまで対象を広げ、介護制度や介護の社会化、あるいは家族介護について検討する必要性が指摘される。さらに、家族介護に対する関わり方が多様化する中で、どのような選択をしたとしても、家族としての繋がりが否定されない家族のあり方を模索するために、家族とは何か、家族として繋がるとはどういうことなのか、といった家族という関係の枠組みを再規定していく必要性が指摘される。

【文献】

井口高志(2002). 家族介護における「無限定性」: 介護者一要介護者の個別的な関係性に注目して. ソシオロゴス, 26, 87-104.

唐沢かおり(2006). 家族メンバーによる高齢者介護の継続意志を規定する要因. 社会心理学研究, 22, 172-179.

木下衆(2019) 家族はなぜ介護してしまうのか: 認知症の社会学. 京都: 世界思想社.

内閣府(2003). 高齢者介護に関する世論調査
(<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/10/s1027-6d2.html>) (2021年8月28日)

内閣府(2010). 介護保険制度に関する世論調査
(<https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-kaigohoken/index.html>) (2021年8月28日)

柴田由己, 安部 幸志, 新井 明日奈, 荒井 由美子(2010). 一般生活者を対象とした認知症家族の介護に対する感情尺度の作成. 日本老年医学会雑誌, 47, 315-322.